中国における危機言語問題

—言語転用が招く言語の死—

宮　本　大　輔

1. はじめに

本論は，主に「世界全体の危機言語概況」，「中国の危機言語概況」，「中国における危機言語の実例」の三つに分けることができる。

次章の 2. 世界全体の危機言語概況においては，各国の危機言語学者やその他の研究機関の危機言語に関する近年の動きを概観し，その上で世界の言語総数，現在危機言語に瀕していると目される言語の数，そして言語使用状況などについて見ていきたい。

次に，3. 中国の危機言語概況においては，視点を中国へと移し，中国の少数民族を夏国俊 (2003) による言語転用状況のデータと黄行 (2000) による言語活力のデータに基づいて，4 タイプに分類することを試みた。

最後に 4. 中国における危機言語の実例においては，消滅の危機に瀕する言語の具体的事例として，戴慶厦＆王朝暉 (2003) による雲南省盈江県中緬に位置する芒線寨芒俄村と芒緬村仙島寨で生活を営む仙島人が用いる仙島語の言語使用状況と季永海 (2003) によるチチハル市の北 90 km 余りに位置する三家子村で生活を営む満族が使用している三家子満語の言語使用状況を取り上げる。

2. 世界全体の危機言語概況

2.1　世界の既に消滅した言語

本節では，中国の危機言語の実情を見ていく前置きとして，まずマクロの視点から世界の危機言語の状況を見ていくことにする。

徐世璇 (2001) によると，15 世紀初頭，ヨーロッパの植民地政策が拡張され，植民地戦争，種族の絶滅，法律による禁止，そして同化政策によって，4000～9000 種もの言語がこの世から姿を消した。

また現在，まさに我々の眼前で消滅していった言語もいくつか存在している。1974 年にはヨーロッパの Manx 語，1981 年にはオーストラリアの Warrungu 語，1992 年には Ubuh 語，同じく 1992 年にはトルコの Ubykh 語，1995 年にはカメルーンの Kasabe 語，そして 2000 年には中国四川省の羿人語が，それぞれその最後の言語使用者と死を共にした。

2.2　危機に瀕している言語

世界経済の一体化と地域経済発展の加速，各種メディアの現代化の急速な発展と普及，少数民族地域など封鎖・半封鎖地域の急速な開放化，共通語などのマジョリティ言語の普及力強化などに伴い，少数民族言語などのマイノリティ言語使用率の低下は著しくなっており，その一部は消滅の危機に瀕している。長年アラスカ原住民言語の研究に携わってきた Michael Krauss (1992) によると，世界に存在する 6528 種 (Barbara, 1992 “Language of the world” 12th) の言語の内，その 90～95 %が 21 世紀中にコミュニケーション能力を失い，国家または地域の共通語にその地位を明け渡すことになるという。その報告を受けて 1995 年 11 月 18～20 日，東京において危機言語国際シンポジウムが開かれ，UNESCO のメンバーと各国の専門家たちがその会議に参加した。その席上で，危機言語国際情報交流センターとアジア太平洋言語学研究委員会が発足し，共に危機言語問題に取り組むこ

ととなった。

この会議の後，発表された論文 Yamamoto (1998) によると，世界 6760 種（D. Harmon 1994 — Yamamoto, 1998 より）の言語をその使用人口に照らして出した統計は以下の通りである：

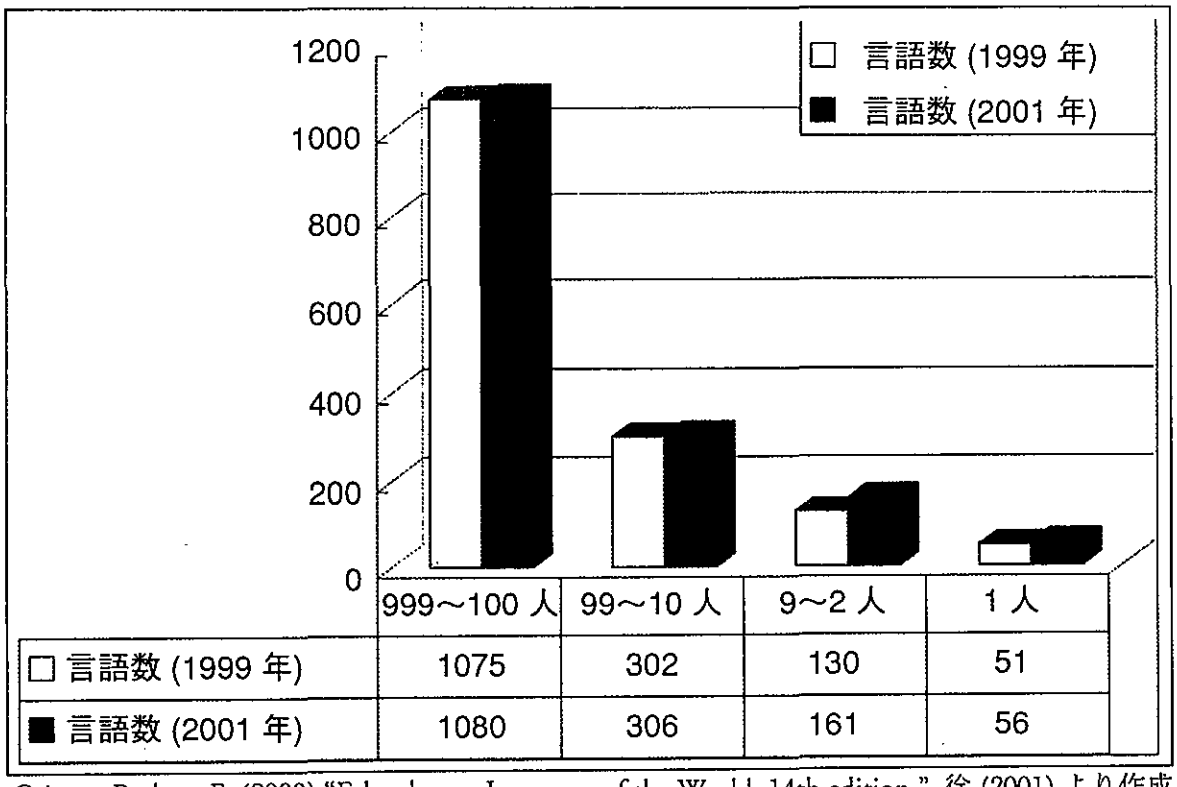
表 1　世界の言語使用状況

各種言語使用人口（人）	言語総数とパーセンテージ（%）	使用者人口（人）
1,000,001 以上	269 (3.9%)	5,089,528,969
100,001-1,000,000	616 (9.1%)	202,137,068
10,001-100,000	1363 (20.1%)	52,333,194
1,001-10,000	1664 (24.6%)	7,419,055
101-1,000	1096 (16.2%)	543,562
100 以下	488 (7.2%)	18,511
既に消滅	234 (3.4%)	0
世界の言語総数	6,760 (100%)	–

David Harmon 1994 "The Status of the World's Languages." Yamamoto, Akira (1998) より転用

その後，発表された論文 Barbara (2000) によると，世界には 6809 種 (Barbara, 2000) の言語が現存する。そのうち使用人口が 1000 人に満たないものの統計比較は以下の通りである：

図 1　世界の使用人口 1000 人未満の言語数比較

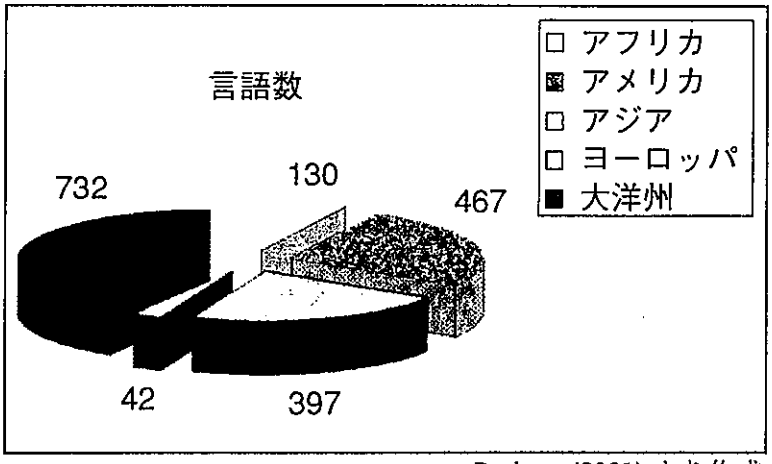


Grimes, Barbara F. (2000) "Ethnologue: Language of the World. 14th edition.", 徐 (2001) より作成

Barbara (2001) の最新データによると，現在，世界でその存在が確認されている言語の総数は 6818 種となっているが，言語使用人口が 1000 人に満たない言語はその 3 割近くを占めており，図 1 のデータと共に鑑みると，少しずつではあるが，確実に増加していく傾向にある。

以下は，使用人口 1000 人以下の言語の数を国別に統計したもの：

図 2　使用人口 1000 人以下の言語・エリア別統計



Barbara (2001) より作成

図 2 を見れば分かるように，最も多く危機言語を有するのは大洋州である。特にパプアニューギニアにはその半数近くが存在している。パプアニューギニアは元々 1000 を超える言語を有しているが，19 世紀の後半にオランダ・ドイツ・イギリスの植民地となっていたためか，マイノリティ言語の多くが危機に瀕している。

では，次節から視点を世界全体から中国へと移し，その状況を詳しく見ていくことにしよう。

3. 中国の危機言語概況

3.1　中国の言語状況

孫宏開 (1990) によれば，中国の新しく発見された言語調査研究の最新デ

ータを合わせた中国の言語使用状況と人口比率はおおむね以下の表のようになる：

表２　中国の言語使用状況

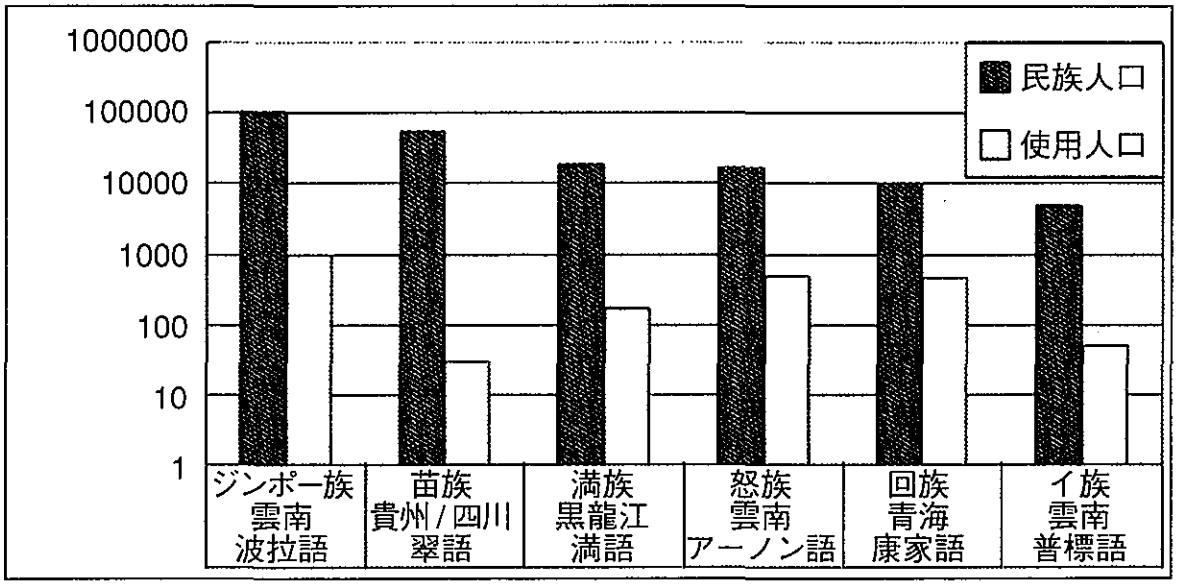
各種言語使用人口（人）	言語総数とパーセンテージ（%）	使用者人口（人）
10,000,001 以上	2 (1.6%)	1,120,000,000
1,000,001-10,000,000	10 (7.8%)	31,000,000
100,001-1,000,000	17 (13.3%)	12,100,000
10,001-100,000	34 (26.5%)	1,300,000
1,001-10,000	41 (32.0%)	219,000
101-1,000	15 (11.7%)	11,000
100 以上	7 (5.5%)	400
近年既に消滅	2 (1.6%)	0
中国の言語総数	128 (100%)	–

孫宏開 (1990) より作成

本論では，基本的に使用人口 1000 人以下の言語を危機言語として扱っているが，使用人口 1000 人以上の言語が全て "safe" かというと一概にそう断言することはできない。ある言語は使用人口こそ少ないものの，まだ言語活力があり，現在では危機言語には属していない。これは，主に彼らが高山や密林・峡谷などの非常に厳しい生活環境に居住しており，外部の人間と接触する機会が極端に少ないからだと考えることができる。彼らの大部分はモノリンガルで，彼らの言語はその生活状況によって突発的に変化することはないため，近い将来，突如消滅することはないと推測される。逆に，ある言語は使用人口が多いにもかかわらず消滅の危機に瀕している。例えば，トゥチャ語は母語人口 200,000 人（モノリンガル：50,396 人，バイリンガル：149,604 人）を有するものの民族総人口の 7.05 %に過ぎず，残りの 92.95 %が既に言語転用をしており，今後，更なる言語転用の拡大が予想されるため，やはり消滅の危機に瀕しているといって良い。またある言語は民族人口が多いにもかかわらず，既に消滅するか否かの瀬戸際に立たされている。例えば，ショオ族は 709,600 人（全国第五回人口調査）もいるが，ショオ族の母語使用人口は 1,000 人にも満たず，その内のバイリンガル人口は，その大部分が第二言語である普通話を母語よりも流暢に話すことができる。その上，民族総人口 99.74 %が既に言語転用をしている。このこと

から，数年後にはショオ語は次第に消滅していくだろうことが分かる。コーラオ語・タタール語・アーノン語・普標語そして 4.1，4.2 で詳述する仙島語・三家子満語はいずれも同様に消滅の危機に瀕する言語である。図 3 は，現在，消滅の瀬戸際に立たされている言語の民族人口と民族使用人口をグラフにしたもの：

図 3　中国において消滅が間近だと思われる言語



これらのマイノリティ言語を用いている少数民族を見ると，彼らの大部分は既に他民族言語（特に普通話）に転用している。つまり，多くの地域，或いは多くの民衆が既に多言語を転用しており，わずかな地域だけが未だにその民族の母語を保っているということである。母語を保っている地域には，家庭や村において常に母語を用いる人々がいるが，彼らは他民族が生活する土地へ行くと，一転して他民族の言語を用いる。これらの母語を話すことができる人々の中では，一般的に老人は流暢に話すが，若者はそれ程熟練していない。特に幼い頃に母語を話す環境から離れた人は，往々にして母語を話すことはできない。

このようなマイノリティ言語がが消滅する主な原因と考えられているのが次節で扱う言語転用問題である。

3.2　言語転用問題

言語消滅の重要な原因の一つとして挙げられるのが，言語転用である。中国政府が普通話政策を推し進め始めてから，少数民族の中で普通話を話すことができる人口は日増しに多くなり，各民族のバイリンガル人口の構成比率も急速な高まりを見せている。それと共に母語を捨て，中国における威信言語である普通話に転用する人口の比率も次第に高まってきている。筆者はその言語転用人口の分布状況を言語活力・モノリンガル人口・バイリンガル人口・言語転用人口などのデータに基づき，次の 4 タイプに分類した。

I.　普遍型：一つの民族の言語転用人口がその民族総人口の 50 %以上を占める状況を指す。中国では次の 8 民族がこのタイプに属している。ショオ族・トゥチャ族・シボ族にモノリンガル人口が多少見られ，ウズベキ族に比較的多数のバイリンガル人口が見られるが，このタイプに属する民族のほとんどが言語転用をしており，これらの民族の言語は今最も消滅に近い言語だといっても過言ではないだろう。

表 3　言語転用・普遍型に属する言語

言語活力	民族	モノリンガル		バイリンガル		言語転用者	
		人口	%	人口	%	人口	%
三級	満族	0	0	500	0.01	4,304,481	99.99
三級	ショオ族	566	0.15	399	0.12	371,000	99.74
三級	トゥチャ族	50,396	1.78	149,604	5.27	2,636,814	92.95
三級	コーラオ族	0	0	6,696	12.36	47,468	87.64
三級	ホジェン族	0	0	220	14.78	1,269	85.22
三級	タタール族	0	0	1,032	25.04	3,090	74.96
二級	シボ族	7,473	8.93	19,891	23.77	56,319	67.3
三級	ウズベキ族	0	0	5,013	41.05	7,200	58.95

統計データは夏国俊 (2003) による

II. 進行型：一つの民族の言語転用人口がその民族総人口の 50～15 %を占める状況を指し，次の 15 民族がこのタイプに属している。

表 4　言語転用・進行型に属する言語

言語活力	民族	モノリンガル		バイリンガル		言語転用者	
		人口	%	人口	%	人口	%
三級	ヌー族	6,971	30.45	4,525	19.76	11,400	49.79
三級	オロチョン族	29	0.71	2,074	50.55	2,000	48.74
三級	チャン族	7,094	6.9	56,929	55.37	38,792	37.73
三級	トゥー族	24,666	15.45	76,912	48.18	58,054	36.37
三級	パウナン族	846	9.38	5,105	56.62	3,066	34
三級	キン族	500	3.81	8,238	62.85	4,370	33.34
三級	ロッパ族	581	28.14	819	39.66	665	32.2
三級	ヤオ族	539,836	38.23	447,180	31.67	424,951	30.1
三級	プミ族	6,749	27.84	10,289	42.45	7,200	29.71
三級	マオナン族	10,762	28.2	177,97	46.64	9,600	25.16
三級	ユーグ族	1,530	14.48	6,409	60.65	2,629	24.88
二級	トン族	725,331	50.85	384,989	26.99	316,080	22.16
二級	ミャオ族	2756,289	54.89	1243,711	24.77	1021,175	20.34
一級	モンゴル族	1707,583	50.06	1023,380	30	680,404	19.95
三級	リ族	261,001	29.42	468,111	52.77	157,995	17.81

統計データは夏国俊 (2003) による

III. 移行型：一つの民族の言語転用人口がその民族総人口の 15 %以下を占めかつ言語活力が三級に属する言語を指し，次の 15 民族がこのタイプに属している。このタイプに属するジノー族は現在の言語転用率は 0 %だが，雲南大学の方鉄（中国青年報 2004 年 2 月 16 日）によれば，近年既に母語教育を放棄しており，今後言語転用率は拡大するものと予測される。

表 5　言語転用・移行型に属する言語

言語活力	民族	モノリンガル		バイリンガル		言語転用者	
		人口	%	人口	%	人口	%
三級	アチャン族	10,060	49.23	7,516	36.78	2,857	13.98
三級	タジク族	12,501	47	10,583	39.79	3,516	13.22
三級	エヴェンキ族	565	2.91	16,435	84.73	2,398	12.36
三級	トンシャン族	96,135	34.39	149,388	53.44	34,000	12.16
三級	サラール族	24,809	35.88	37,826	54.71	6,500	9.4
三級	ダハール族	19,367	20.58	66,159	70.29	8,600	9.14
三級	ペー族	414,891	36.64	615,333	54.35	102,000	9.01
三級	プーラン族	36,106	61.75	17,215	29.44	5,152	8.81
三級	水族	166,552	58.06	103,166	35.96	17,190	5.99
三級	トーアン族	7,132	58	4,591	37.33	574	4.67
三級	僮族	364	33.77	714	66.23	0	0
三級	ムーラオ族	35,122	38.87	55,235	61.13	0	0
三級	ジノー族	5,836	48.79	6,126	51.21	0	0
三級	メンパ族	5,110	82.14	1,111	17.86	0	0
三級	トーロン族	3,984	85.99	649	14.01	0	0

統計データは夏国俊 (2003) による

IV. 母語保持型：一つの民族の言語転用人口がその民族総人口の 15 %↓を占めかつ言語活力が高い言語を指し，次の 15 民族がこのタイプに属している。このタイプに属する言語は全てがその民族特有の文字を有し，民族言語も広範囲で機能しており，彼らの居住環境において非常に高い威信を維持していることが分かる。そのため言語転用率も低く，母語を保持できていると言っていいだろう。

表 6　言語転用・母語保持がに属する言語

言語活力	民族	モノリンガル		バイリンガル		言語転用者	
		人口	%	人口	%	人口	%
二級	プイ族	774,158	36.53	1,154,446	54.47	190,741	9
二級	キルギス族	37,987	33.5	66,264	58.44	9,135	8.06
二級	イ族	3,007,454	55.15	2,064,329	37.85	381,781	7
二級	ワ族	198,466	66.46	83,489	27.96	16,656	5.58
二級	タイ族	483,168	57.55	316,628	37.72	39,700	4.73
二級	ナシ族	110,465	43.91	131,127	52.17	10,000	3.97
二級	ラフ族	202,277	66.48	89,981	29.57	11,998	3.94
一級	チベット族	3,158,504	82.08	538,106	13.98	151,265	3.94
二級	チワン族	5,659,896	42.29	7,323,190	54.72	400,000	2.99
二級	リス族	384,058	79.7	96,826	20.09	1,000	0.21
一級	朝鮮族	974,207	55.2	787,997	44.64	3,000	0.17
二級	ハニ族	649,024	61.3	408,782	38.61	1,000	0.09
一級	ウィグル族	5,931,417	99.46	26,887	0.45	5,187	0.09
二級	ジンポー族	60,979	65.59	7,350	7.91	0	0
一級	カザフ族	815,244	89.83	92,302	10.17	0	0

統計データは夏国俊 (2003) による

ここで表中の言語活力という言葉について説明しておくと，これは各マイノリティ言語が法律・経済・メディア・教育といった分野においてどれほど使用されているのかということを数字化しその点数の高低によって言語の活力を三段階に分けたものである。一級に属する言語の言語活力が最も強い。詳しい算出方法については G. D. McConnel and J-D. Gendron (1993) "International Atlas of Language Vitality (China)"（黄行 (2000) より転載）を参照のこと。

4. 中国における危機言語の実例

4.1　事例 1：仙島語

仙島（先島）人は雲南省盈江県中緬に位置する (a) 芒線村芒俄寨と (b) 姐冒郷芒緬村仙島寨に分布する部族で，2002 年 12 月の統計によると部族総数が 76 人であるため，民族として認められていない，まさに消滅の危機に瀕

した存在なのである。80 年代以前，彼らは部族不明とされており，その地理的分布と言語的特徴からアチャン族のグループに入れられていたが，生活習慣・宗教信仰・心理状態などにおいてアチャン族とは異なるため，近年一つの独立した部族としてみなされるようになった。

戴慶厦・王朝暉 (2003) は仙島語の主な特徴として以下の 4 項目を取り上げている。

(1) 音韻的なもの：①閉鎖音・破擦音の子音には清音しかない，②鼻音・側音の子音には清音化するものと非清音化するものの両方が存在する，③連続子音はないが，両唇音・舌尖音・舌根音の子音には巻舌化と非巻舌化の両方がある，④韻母には長短・緩急の区別がない，⑤ -m, -n, -ŋ, -p, -t, -k, -ʔ 等 7 つの子音語尾がある，⑥ 4 つの声調があり，変調も多い。

(2) 形態上のもの：①動詞は自動態と使役態を持ち，屈折語と付加語の二種類がある。そして屈折語には更に有気と無気，鼻音・側音の清音化と非清音化，閉鎖音子音と清摩擦音の選択という 3 つの方式がある，②部分支配構造フレーズの動詞と名詞が同じである，③人称代名詞には単数・複数・偶数があり，目的格と所有格の形態的変化はない，④量詞は豊富で，名量詞は度量衡・類別・形状・グループなどの異なるタイプ別に分かれる。⑤反響型の量詞もあるが，数は少ない，⑥形容詞は重ね，副詞・述語・修飾語になることができる，⑦主語・目的語・修飾語・副詞フレーズ・補語を表す構造助詞がある，⑧述語助詞はそれぞれ異なる人称と数を表す。

(3) 統語的なもの：語順と虚詞を主要な語法手段としている。

(4) 形態変化は少ない：①単数指示代名詞が名詞を修飾する際は名詞の前後どちらに位置してもよく，複数指示代名詞は名詞の後にしか置くことができない，②形容詞・数詞が名詞を修飾する際は，名詞の後に置く，③副詞は主要語の前に置かれる，④補語は主要語の後に置かれ，間には補語助詞を加えなければならない。

上述した仙島語の特徴はアチャン語隴川方言との間に多くの共通点が見られるため，両者は密接関連しているといえる。これらの事から，仙島人はアチャン族から分化したものだとも考えられる。

仙島人は元の民族主体から分化した後，海抜 1400 mという非常に劣悪な自然環境に居住したことによってその社会構造・経済状態・民族関係などが大幅に変化し，それが彼らの言語状況をも変化させ，ひいては仙島語の使用機能の変化と消滅危機を招くこととなったのである。仙島語の使用機能の変化は二つの段階に分けることができる。一つは 50 年代以前のバイリンガル発展段階，もう一つは 50 年代以後のバイリンガル普遍段階である。注意しなければならないのは，ここで筆者が用いたバイリンガルとは仙島語と普通話の二言語併用 (diglossia) を指すのではなく，本民族以外の少数民族言語と普通話の二言語使用，あるいは本民族以外の少数民族言語と更に別の少数民族言語の二言語使用を指すということである。

(a) 芒線村芒俄寨移住グループ

バイリンガル普遍段階期の 1958 年に一部の仙島人が山中にあった村から芒線村芒俄寨に移住した。芒線村芒俄寨は主に漢族が居住していたため，仙島人は普通話を学ぶようになり，その結果彼らの母語使用状況は以下のように変化していった。

右の表 7 を見ればわかるとおり 40 歳以上の人々の間では聞くことも話すことも全く問題はないが，それ以下になると，まず話すことができなくなり，ついで話すことはおろか聞くことさえもできなくなってしまっている。それでは仙島語を解する人々の言語的熟練度はどうなのだろうか。熟練型に属するのは 72 歳の老人ただ一人で，半熟練型に属すのは 40 歳以上の人々で日常会話には差し支えない。30～40 歳の人々はわずかに理解できるだけで，聞くことはまだできる。仙島語の使用範囲もごく一部（二世帯）に限られ，余腊萍と彼女の息子，楊腊光とその妻との間で用いられているのみである。

表 7　仙島語習熟度（芒俄寨）

年齢	聴く	話す
40↑	○	○
31～39	○	×
30↓	×	×

また，移住後 44 年が経過した 2002 年の調査当時には基本的に普通話への言語転用が完成しており，芒線村芒俄寨の仙島語はまさに消滅寸前なのである。

(b) 芒緬村仙島寨移住グループ

1958 年に山中の村に移住しなかった仙島人は 1995 年，政府の助けを借りて全て芒緬村仙島寨に移り住んだ。仙島寨は交通も便利で，仙島人の貧困問題は解決され，更に教育レベルも改善された。しかも，この仙島寨内では仙島語が主なコミュニケーション手段となっており，仙島人はほぼ仙島語を解する。彼らの母語熟練度は次の通りである。

熟練型に属するのは 40 歳以上の人々で，半熟練型に属するのは 20～39 歳の青年・中年 13 人でこれは 31.7 %を占める。そして，19 歳以下の少年・児童 16 人は未熟型に属し，聴くことは問題ないが，少ししか話すことはできない。また，その内の何人かは既にジンポー語に転用している。

現在のところ，上述したようにの仙島寨内では仙島語が主に使用されているが，子供たちの中には家庭内では仙島語ではなくジンポー語を話すというものもいる。

4.2　事例 2：三家子満語

三家子村はチチハル市富裕県ダハール・満・キルギス友誼郷内にあり，チチハル市の北 90 km 余りに位置し，満族は 7000 人余りが生活いている。現在，三家子満族の一部が満語を使用して簡単なコミュニケーションをとる以外，チチハル市のその他の地域で生活を営む満族は基本的に普通話に転用している。だが三家子満族の満語使用状況も消滅の危機に瀕している。その原因は，社会的要素全体の変化であり，中でも重要なものは民族関係と婚姻後の家庭環境という要素の重大な変化が引き起こしたものである。

現在までの三家子満語の使用状況について，季永海 (2003) は次のように述べている。

1920 年代，三家子の村民は全て満族で，満語の保存にはもってこいの条件だった。しかし，60 年代以降，大量に漢族が移住し始め，満族と漢族間の婚姻が増え，村内の民族成分と家庭内の民族成分が次第に変化し，普通話の影響下で満語は衰退の一途をたどったのである。以下に示したのは (1) 1961 年，(2) 1986 年そして (3) 2003 年の調査結果である。

(1) 1961 年

この時期の人口状況は総世帯数：101，村民：419 名で，その内訳は以下の通り：

表 8　1961 年時三家子村人口状況

	満族	漢族	ダハール族
世帯数	80戸	19戸	2戸
人　口	355人	54人	10人

そして満語の使用状況と熟練度は以下の通りである：

表 9　1961 年の三家子村満語使用状況

年齢	人口	満語レベル	具体的な状況
50歳以上	58人	満語◎（高い）	普通話△
20歳以上	108人	満語○普通話○	家庭内では満語が多い
20歳以下及び児童	189人	普通話○満語△	一部は満語×

上の表で満語レベルが非常に高い 50 歳以上の人々は幼い頃からまず満語を学び，その後普通話を学び始めた。そのため，彼らの普通話は母語の影響を強く受けている。逆に普通話を満語より上手く操る 20 歳以下及び児童は，まず普通話を学び，その後満語を学び始めており，彼らの普通話レベルは現地の漢族のものとさしたる変わりはない。

この時期の三家子村ではその総人口の 84 %を満族が占めており，家庭生活の中では大部分が満語を使用して交流していたため，満語は依然として重要なコミュニケーション手段であった。そのため，満語は依然として一定程度以上の威信を備えていたものと考えられる。

(2) 1986 年

この時期の人口状況は総世帯数：229 世帯，このうち満族 121 世帯，漢族：108 世帯で，村民は 1000 人余りで，満族が 50 %以上を占めていた。

満語の使用状況と熟練度は以下の通りである：

表 10　1986 年の三家子村満語使用状況

年齢	人口	満語レベル
主に40歳以上	約80人	◎（高い）
主に30歳以上	約150人	○
主に青少年	約150人	聴く：○　話す：△
	約20人	聴く：○　話す：×
	約80人	基本的に分からない

多数の家庭内部で満語が主流だが，同時に一部の満族の家庭では普通話でコミュニケーションをとるという状況が現れた。この時期から次第に普通話への言語転用が急増し始め，満語の威信は急激に低下することとなった。

(3) 2003 年

1961 年から三家子満族は人口的に圧倒的優位を占めてきたが，1986 年には漢族と満族が半分ずつを占めるようになり，その後も漢族や他民族の移住は続き，2003 年になると，村の人口構成状況は根本的に覆り，満族の人口的な圧倒的優位は完全になくなった。さらに純粋な満族の家庭は激減した。

三家子村における世帯数比率は，村の総世帯数 329 に対して，満族が 53 世帯，漢族が 113 世帯，満族漢族同居が 113 世帯，その他が 50 世帯となっている。人口比は，総人口 1100 人余りに対して，満族は 452 人で，村の全人口の 40 %強しかいない。彼らの満語使用状況とその習熟度は以下に示す通りである：

表 11　2003 年の三家子満語使用状況

年齢	人口	満語レベル
60歳～70歳	8	◎（高い）
主に40歳以上	48	○（普通）
主に30歳以上	92	△（少しわかる）
主に30歳以下	304	×（分からない）

上述した満語レベルの「◎（高い）」という項は満語を聴き取ることができ，日常用語を話すことができることを指し，「○（普通）」という項は基本的な語句を覚えており，簡単な文を話すことができることを指す。もちろん，この時期の「◎（高い）」と 1961 年時，1986 年時の「◎（高い）」とはその習熟度の度合いがまるで違う。

このように，青少年及び児童による母語使用率が低下し，普通話を主とした言語転用率が増加することは，即ち，そのマイノリティ言語の消滅が近いことを意味しているのである。

5. 結論

以上，中国の危機言語について分析してきた結果，主に以下の事実が浮かび上がってきた。

(1) 現在，危機言語問題は中国だけの問題だけではなく，グローバルな問題となっている。Michael Krauss (1992) の予測によると，21 世紀中に世界に現存している 6,760 種の言語のうち半分（最大 95 %）が消滅するという。その予測に対して UNESCO と言語学者たちは危機言語国際情報交流センターとアジア太平洋言語学研究委員会を設立し，対策を講じることとした。

(2) 中国に現存する 128 種の言語のうち 22 種（使用者：11,400 人）が消滅の危機に瀕している。該当するそれぞれの言語の使用者総数は 1000 人にも満たない。そして 2 種の言語がすでに消滅してしまった。また仙島語のように今まさに消滅の危機に瀕している言語もいくつか

存在している。

(3) 言語転用者の構成比率によると，言語転用人口は4つのタイプに分けることができる。具体的には普遍型（50％↑），進行型（15～50％），移行型（15％↓・言語活力が低い），母語保持型（15％↓・言語活力が高い）である。そして，移行型に属するジノー族はすでに母語教育を放棄しており，母語であるジノー語は近い将来，言語転用が急増し，急速に移行型→進行型→普遍型という道筋をたどり，最後には消滅するだろうことが予想される。

(4) 現在，中国で正に消滅の瀬戸際に立たされていると言える「仙島語」と「三家子満語」は，青少年及び児童の母語話者をほぼ持たない状況に陥っており，近い将来確実に失われることが予想できる。

中にはマイノリティ言語の消滅はここまで重要視する問題ではない，古代から続いてきた自然淘汰の一種なのだから気にかけることはない，既に言語機能を失いつつある言語をなぜ保持しなければならないのか，と考える読者がいるかもしれない。しかし，中国に限らず世界のマイノリティ言語の消滅が意味するものは，人類の文化的多元性の消失なのである。目下の所，経済的に十分に潤っていない少数民族たちは，その心理的な余裕のなさからその大切さを顧みることもせず，自ら母語を放棄し，マジョリティ言語を学ぶことによって，経済を発展させようとする。その後，経済的にも心理的にも余裕ができ，自分たちのアイデンティティーを顧みたとき，そこにあるべき母語が既に消滅していたという状況が生まれる。そうなってからでは遅いのだ，そうなる前に母語の大切さに気づかなければならない。

また，今日威信言語を転用している少数民族たちも決して自ら望んで母語を放棄したわけではない。その土地の威信言語を用いなければ市場に参入することさえできないこの世界で生きていくためには，威信言語を転用せざるを得なかったのである。故に責められるべきは，単一言語政策を選択し，推し進める国家のエゴイズムなのではないかと筆者は考える。

現在，中国では威信言語である普通話教育が盛んに推進されている。そ

の中でマイノリティ言語である各少数民族言語が，いつまでもその原型を保っていくことはできない。本文中でも触れた母語保持型に属する少数民族言語がある程度の威信を備えている地域であれば，近い将来その少数民族言語が忽然と姿を消すということはないだろう。しかし，更に未来を見据えれば，今のままでは消滅を免れることはできない。その運命をどうすれば変えることができるのだろうか。これは，今後の中国における言語政策が直面する重要課題であると筆者は考える。

参考文献

大东文化大学中国语大词典编纂室编　1999　现代汉日辞海　北京大学出版社
戴庆厦・王朝晖　2003　仙岛语的语源其濒危趋势　民族语文　2003 年第 3 期
Grimes, F. Barbara 1996 *Ethnologue: Language of the World.* 13th edition. SIL International Dallas, Texas
Grimes, F. Barbara 2000 *Ethnologue: Language of the World.* 14th edition. SIL International Dallas, Texas
Grimes, F. Barbara 2001 Global Language Viability. in Osahito Miyaoka, *Lectures on Endangered Languages*: 2 ELPR
黄行　2000　中国少数民族语言活力研究　中央民族大学出版社
季永海　2003　濒危的三家子满语《民族语文》2003 年第 6 期　p. 39-43
Krauss, Michael 1992 The world's languages in crisis. *Language* 68/1
Krauss, Michael 1998 The scope of Language endangerment and recent responses to it. in Kazuto Matsumura (Edi), *Studies in Endangered Languages.* ひつじ書房
Krauss, Michael 2001 Mass Language Extinction, and Documentation: The Race against Time. in Osahito Miyaoka, *Lectures on Endangered Languages*: 2 ELPR
吕必松　1999　语言教育问题研究论文集　华语教学出版社
Stephen A. Wurm 2001 Language Endangerment and Death-Ways and Methods for Maintaining and Rreinvigorating Endangered Languages. in Osahito Miyaoka, *Lectures on Endangered Languages*: 2 ELPR
孙宏开　2001　关于濒危语言问题
孙若穷主编　1990　中国少数民族教育学概论　中国劳动出版社
王锡宏　1998　中国少数民族教育本体理论研究　民族出版社
王远新　2002　中国民族语言学—理论与实践—　民族出版社
夏国俊主编　2003　民族教育改革创新管理与评价　宁夏大地音像出版社

许嘉璐／陈章太主编　1999　语言文字学极其应用研究　广东教育出版社
徐世璇　2001　濒危语言研究　中央民族大学出版社
徐世璇　2002　语言濒危的原因探讨《民族研究》2002年第4期　p. 56-64
Yamamoto, Akira 1998 Linguistic and endangered languages communities: issues and approaches. in Kazuto Matsumura (Edi), *Studies in Endangered Languages*. ひつじ書房
于根元　1996　二十世纪的中国语言应用研究　书海出版社
周庆生　2000　语言与人类　中央民族大学出版社